

ネットいじめ言説の特徴 —新聞記事の内容分析から—

Characteristics of Cyberbullying Discourse -From Analysis on Newspaper Articles-

田川 隆博
Takahiro TAGAWA

本研究の目的は、新聞記事の内容を分析することでネットいじめ言説の特徴を整理し、その問題点について論じることである。ネットいじめの記事は2007年ごろから見られるようになる。ネットいじめが問題化し始めた当初は、悪質化、深刻化、陰湿化などを訴える新聞記事が多かった。2008年ごろには学校裏サイトが注目を集めるようになり、学校裏サイトが問題視されるようになったが、その後記事は減少した。それにかわって2009年ごろから増え始めるのが、ネットいじめへの具体的な対応や対策を紹介する記事である。

こうしたネットいじめ言説は「子どもとケータイ問題」として論じられるという特徴がある。そして、子どもとケータイ問題として論じられることで、子どもたちの学校での人間関係の問題が隠されてしまうという点を本研究は指摘した。

This study aims to define characteristics of discourse over cyberbullying through analysis on newspaper reports and to argue what will be a problem there. Articles about the subject appeared on papers around 2007. When this new type of bullying was becoming an issue, many of the reports stressed increased viciousness, seriousness and stealthiness. About one year later, unofficial websites of schools caught people's attention, and the shady space for gossiping came to the center of discourse. After that, the appearance of articles reduced. What has been increasing since about 2009 is the number of the articles that introduce concrete ideas and measures of anti-cyberbullying.

It is a characteristic of the discourse that they often consider the cyberbullying as a children-and-mobile phone issue. This study points out we could fail to pay attention to children's personal relationship at school as long as we discuss the issue in that way.

キーワード：ネットいじめ 言説 ケータイ 学校裏サイト

Cyberbullying, Discourse, Mobile phone, School unofficial site

1. 問題

本研究の目的は、ネットいじめに関する新聞記事の内容を分析することで、議論の枠組みや方向性を明らかにし、論じられない問題や見落とされる問題について考察することである。

ネットいじめとは、学校裏サイト、動画投稿サイト、ソーシャルネットワーキングサービス (SNS)、チャット、メール、ブログ、プロフなどを利用したいじめである。そして、ネットいじめには、次のような「新しさ」が見られる。すなわち、①かげ口へのアクセシビリティの向上、②動画や画像を撮影しアップする「行為の記録」、③個人情報の「晒し」、④大量情報によって被害者を圧倒する「数の暴力」である (田川 2010)¹⁾。

こうしたネットいじめに対する言説量が増加したのは2000年代後半に入ってからである。その背景には、ネット環境が変化し、子どもたちのコミュニケーションにも変化が現れたことがあるだろう。すなわち2000年代中盤以降、ネットが双方向性 (ソーシャル) を持つものとして新たな展開が見られるようになったこと、ケータイが子どもたちに行き渡るようになり、いつでもどこでもネットにアクセスできる (リアルタイム) ようになったことが指摘できよう。ソーシャル性とリアルタイム性が高まったことによって、ネット環境はそれまでのものとは異なるものになってきたと言える。

こうしたネット環境の変化を背景にして、人びとのネットへの接し方も変化してきた。インターネットは情報環境の変化を促してきたが、それに加えて、web2.0のような展開はコミュニケーション環境にも変化をもたらした¹⁾。すなわち、交流を目的としたウェブサービスの利用が飛躍的に増えたのである。大量の情報を即時に発信し、受信するという情報環境が、人びとのコミュニケーションのあり方を大きく変えた。人はネットで、知人や同僚、趣味の同じ人、見知らぬ人などと当たり前のように交流する。それは今日のSNSの隆盛に顕著に現れている。

そうした環境変化は当然子どもたちにも影響を与え、ネットで他者と情報交換し、交流する子どもたちが増加した。これまでになかった情報環境で子どもたちは新しい形での交流を行い始めた。

ネットいじめは、ネットが子どもたちにとって、情報という意味でもコミュニケーションという意味でも身近になったからこそ起きた事象であると言える。そして、そうした新しさに対して、さまざまな言説が

生み出された。

本稿では、言説レベルでのネットいじめがどのように問題化されているのかを新聞記事に着目して整理してみたい。ネットいじめの現状、方法、特徴、対策という観点から整理し、記事で多く言及される論点を抽出し、その問題点について検討していきたい。

2. 方法

本稿で参照する新聞記事は、日本ミック社発行の『切りぬき速報 教育版』2008年1月～2011年11月号に掲載されたものを対象とする。すべての記事から、ネットいじめをキーワードとして見出しや内容に含むものを抽出した。学校裏サイトでの中傷、メールでいやがらせ、ネット攻撃など、ネットいじめの範疇で捉えられる類似のキーワードを含む記事も抽出した。結果は101件の記事が該当した。本稿はこの101件の記事を分析対象とする。

これらの新聞記事について、ネットいじめの現状を訴えるもの、ネットいじめの方法や具体的事例を分析するもの、ネットいじめの特徴を指摘するもの、ネットいじめ対策の課題を提起するものという、4つの観点に着目して整理する。

3. 結果：ネットいじめ言説の特徴

3-1 ネットいじめの現状：急増、悪質化、深刻化

広がる陰湿ネットいじめ (2007.10.02 読売)
増すネット攻撃陰湿化 (2007.11.16 産経)
ネット中傷 悪質化 (2008.01.16 朝日)
ネットいじめ深刻 携帯サイトで中傷 主流 (2008.11.21 朝日)
プロフに中傷 後に中3自殺 ネットいじめ深刻 (2009.01.19 朝日)
2年以内に「ネットいじめ」あった 中学66%、高校71% (2009.03.29 上毛新聞)
携帯持つ高校生 7割トラブル経験 中学生6割 小学生3割 (2010.01.21 北海道新聞)

ネットいじめの現状について、「深刻化」「悪質化」「陰湿化」「広範な広がり」などのキーワードを使って分析する記事は、101件中15件であった。これらのキーワードを含む記事には以下のような特徴が見られる。

ネットいじめが「急増」しているという表現は

2007, 2008年頃よく使われ、それ以降はほとんど使われていない。このことから考えれば、この時期にネットいじめが問題化したと見て良いだろう。「深刻化」や「悪質化」を訴える記事も2007, 2008年ごろに集中しており、それ以降はあまり見られない。このことは、2007年に神戸で起きた高校生の自殺事件以降、ネットいじめが急速に社会問題化してきたとする指摘にもつながる(荻上 2008²⁾; 渋井 2008³⁾)。また、後述する文科省の学校裏サイト調査が行われたのも2008年で、そのときに非常にたくさんの学校裏サイトがあることが調査データとして公開された。そして、学校裏サイトにおける交流はネットいじめにつながりやすいとされた。よって、ネットいじめは2007~2008年ごろに急速に社会問題化したと考えられるだろう。その後、新聞記事の中心は急増、深刻化、悪質化を訴えるものから、原因・背景分析や特徴、対策などへと移っていくことになる。

3-2 ネットいじめの方法：学校裏サイト、プロフ、SNS、動画

メールに突然中傷が… 本人知らぬ間に拡大 見えぬ抜本策 (2007.06.03 西日本新聞)

中高生の学校裏サイト 個人情報や裸映像流出 匿名で「うざい」「死ね」(2007.08.11 毎日)

いじめ動画, HPに 学校側存在を把握 (2007.09.20 朝日)
学校裏サイト 3万8000件 いじめ温床, 生徒自殺も (2008.03.15 京都新聞)

中高生「学校裏サイト」特定の個人を中傷 “いじめの温床”
書き込み経験14% (2008.04.16 産経)

「問題投稿」は710件 学校非公式サイト調査 個人情報の
流布が中心 (2010.02.22 上毛新聞)

書き込み, プロフ半数超 非行行為や自傷告白 裏サイト
から移行 (2010.09.09 東京)

ネットいじめがどのように行われるか、事例を挙げるなどして具体的に示している記事は101件中50件とほぼ半数を占めた。その中で、頻繁に言及されているのが学校裏サイトである。

学校裏サイトとは、公式サイトではない非公認のサイトを指している。文科省の2008年調査で3万8000件見つかったとされるが、子どもたちでパスワード制限をかけてアクセスできないものも含めるとこれらは氷山の一角とされる。こうした大人の目の届きにくい学校裏サイトは誹謗中傷・猥談や、インターネット風俗

業者の広告など有害情報があふれているとされる(下田 2008)⁴⁾。

有害情報があふれている学校裏サイトで、子どもたちが交流を行っていることが、ネットいじめの温床となっていると見られている。

その他に、子どもたちが気軽に交流するものとしてプロフィールサイト(プロフ)もある。そこで交流を行なっているうちに、プロフの掲示板に中傷を書かれたりするという事例も指摘される。

また、2010年以降になるとSNSでの交流からトラブルになるとの指摘が出てくる。2010年9月9日東京新聞では「学校を核にネット監視」の見出しの記事があるが、その中で「子どもをめぐるネットトラブルは、かつて『学校裏サイト』が問題視されたが、最近はプロフやSNSに移行している」との記述がある。

さらに、いじめ動画や被害者の裸画像のウェブ公開も指摘されている。ネットいじめの具体的な方法について整理すると、2008年ごろは学校裏サイトの記事が多数を占めたが、その後はさまざまな方法が指摘されるようになり、2011年では学校裏サイトをキーワードに含む記事はなくなっている。

3-3 ネットいじめの特徴①：誰でも加害者／被害者になる

ネットいじめ 誰でも加害者に (2007.10.17 産経)

軽い気持ちで中傷 被害者「なぜ私が」(2009.01.12 宮崎
日日新聞)

「嫌がることした」中1女子の18%が経験 (2009.04.08 産
経)

軽い気持ちでネットに接している内に誰もが加害者／被害者になる可能性があることを指摘する記事は101件中10件であり数は多くない。匿名性を利用して誰もが安易に書きこむなどの表現を入れるともう少し多くなるが、小さい形でのそれらの表現はさまざまな記事に散見でき、正確なカウントが難しいことから、今回は除外した。

これらの記事は、加害者／被害者関係が固定的でないことを指摘している。匿名性を利用して、気軽に書き込みやすい掲示板などで、軽い気持ちで中傷することがネットいじめにつながるとされる。また、誰もがそうした被害者になりやすいとも見られている。

この記述自体は、森口(2007)⁵⁾も指摘するように、

近年のいじめ議論にも見られるものである。誰もがいじめの加害者となり被害者となる。匿名性の強いネットでは、固定的でないいじめる／いじめられる関係が生まれやすいと指摘されている。

3-4 ネットいじめの特徴②：ネットいじめは発見が難しい

発見、管理難しく（2007.08.11 毎日）
危険はらむプロフ 中高生被害 規制なく対策模索（2008.08.05 朝日）
教員知っていても親気づかず 子どものネットトラブル（2010.02.07 朝日）
ネット教育 先生に難題 小中学生に「情報モラル」を（2009.12.25 日経）
携帯の開 学ばぬ先生 持ち込み禁止は「責任逃れ」（2009.12.28 読売）

先の3-2においても指摘したが、学校裏サイトをはじめとして、子どもたちのネットでの交流は大人の目が届きにくい。ネットいじめを発見することが困難であると指摘する記事は101件中24件であった。

「中高生による掲示板の全体把握は困難で抜本的な対策がないのが現状だ」（熊本日々新聞 2007.04.04）、「裏サイトは子ども同士の口コミで広まる。子どもが親や教師に隠れてコミュニケーションの場を作っているため、校名で検索してもなかなかたどり着けない。学校側が逐一指導するのは難しい」（毎日 2007.08.11）などのような記述がよく見られる。大人の目の届かないところで交流している内に、トラブルに巻き込まれる／引き起こすことがあるとされる。また、2009年12月28日の読売記事に見られるように、ケータイやネットは子どもが得意、大人は苦手という図式が取られることが多く、それがより一層大人の目が届きにくいという印象を強めている。ネットいじめの発見は難しく対応に苦慮している現状が多く記されている。

教師や親の監視に限界があることから、外部に監視を委託するケースも多いとされる。監視や発見の困難を指摘し、ネットいじめの深刻さを訴えるという記事は2007年から2009年ごろに多く見られる。しかし2010年以降はそうした特徴の指摘は少なくなっている。

3-5 ネットいじめ対策：ネットいじめから守れ

学校裏サイト傷つくのは 醜さと向きあう授業（2008.01.20 朝日）
いじめの温床「学校裏サイト」生徒の目線で“ノー”発信 ネットにメニュー 疑似体験も（2009.02.20 中日）
ネット教育、佐賀に注目 発足1年…「Kodomo2.0」が総理大臣賞（2009.04.12 西日本新聞）
ネットいじめから生徒守れ（2009.12.22 北陸中日新聞）
ねっといじめ解決探る 携帯にルール作りを（2010.01.25 上毛新聞）
ネットいじめ 子ども守れ（2009.12.04 日経）
情報モラル教育 教師の苦手意識克服へ（2010.04.16 毎日）

ネットいじめに対して、解決策やルール作りが急務だとし、また具体的な対策を紹介する記事は101件中31件であった。ネットいじめ対策の記事は2009年ごろから増え始める。近年は学校現場の取り組みや教育委員会の活動などを取り上げ、対応策を紹介するという記事が多い。ケータイ使用のルール作り、モラル教育、フィルタリング、持たない・持ち込ませないなどの取り組みを通じて、子どもを守る必要があるという主張が多く見られる。何も知らない子どもが事件やトラブルに巻き込まれないよう、守られるべき存在として子どもが提示される。子どもを守るためには、大人の側が守る存在にならなければならない、ネットへの苦手意識克服などが提示される（2010.04.16毎日）。

ネットいじめ対策への成功事例の紹介などは2009年ごろから増え、2011年にかけてもっとも多い記事のスタイルとなっている。

4. 考察

4-1 ネットいじめ記事の変化

上記で論じてきたように、ネットいじめの記事を振り返ると、おおむね次のような流れになっていることがわかる。ネットいじめが問題化し始めた2007年ごろは、子どもたちの間にネットいじめが広がり、深刻であるということを訴える記事が多い。また、それへの対応は難しく、現場は苦慮しているとされる。特に「苦慮」という表現は2007年から2008年ごろまで頻繁に登場する言葉である。2008年に文科省による学校裏サイト調査が行われるのと前後して、2008年から2009年ごろまでは学校裏サイトによるネットいじめの深刻な現

状や、匿名性を利用した陰湿な方法が繰り返し指摘される。2010年ごろからは学校裏サイトへの言及は少なくなり、変わって学校現場や教育委員会の具体的な取り組みが成功事例として紹介される記事が多くなる。

このような記事の時系列的変化は、ネットいじめとは何かが分からなかったころに比べて、ネットいじめがどのようなものかに対する理解が進んだことを示していると言えるだろう。深刻化、悪質化、陰湿化などの表現は2007年に頻繁に登場するが、その後徐々に使われなくなり、近年はほとんどそのような表現は登場しない。学校裏サイトの監視に苦慮していた現場も、リテラシーの向上や疑似体験などを通して少しずつ効果が出てきているというような記事が多くなる。抜本的な対策はないが、効果のある対応・対策が模索され、広がりつつあるということだろう。

得体のしれないもので、つかみきれなかったネットいじめに対する理解が、だんだんと進んできた現状をこうした記事の変化は示していると見ることができるだろう。ネットいじめの「登場」から時間がたつにつれ、記述も変化し多様化するようになった。

4-2 子どもとケータイをめぐる

ネットいじめ記事に共通しているのは、ネットいじめ問題は、「子どもとケータイ」問題であるという認識枠組みである。

実際、ネットの利用について、多くの子どもたちはケータイからネットへアクセスしている。例えば、内閣府の調査によれば、携帯電話等で情報サイトを閲覧する回数として、中学生の約5割、高校生の7割以上が1日に1回以上アクセスすると答えている（内閣府 2007）⁶⁾。また、総務省（2009）⁷⁾の調査報告では、13～19歳でパソコンよりケータイからのネット利用の方が多いとされる。石野（2008）⁸⁾も、いくつかのデータをもとに、若者のインターネット接続の手段の主流をケータイだと論じている。内閣府（2011）⁹⁾の調査報告では、中学生の49.3%、高校生の97.1%が携帯電話を所有しており、そのうち中学生では5割台後半（57.1%）、高校生では約8割（82.5%）が携帯電話でサイトを見ている。

こうしたケータイやケータイによるネット利用について、それらを好意的に紹介する記事はほとんど見られない。ケータイは、フィルタリングなどの「規制が必要なもの」、学校や家庭で「適切な使用を教えないといけないもの」との位置づけの記事がほとんどを

占める。ケータイはコミュニケーション端末として役立つ道具だから積極的に友人関係に利用していこうという記事はほとんどない。むしろトラブルの原因になりやすいから、子どもに対して何らかの対策が必要であると見られている。

ネットの利用にも同様のことが言える。情報収集や他者との交流にネットは有効だという記事はほとんどない。マナーや適切な使用法を教えるべきものという位置づけである。学校裏サイトについては、危険視する記事ばかりである。

こうした見方の背景には何があると考えられるだろうか。複数の要因が考えられるだろうが、その中で大きいと考えられるのは、「大人が使いこなせないケータイを子どもたちは使いこなしている」という認識が存在していることではないだろうか。実際、3-4、3-5で参照したように「教師は苦手」、「親は知らない」などの表現が新聞記事にたびたび登場している。

1990年代後半からメール機能がケータイに実装され、ケータイでメールのやりとりをし続ける中高生が話題となった。さらにケータイからネットへの接続機能が充実する中で、ケータイは電話から情報端末へと進化するが、こうした変化のスピードに大人たちはついていけないという実感が背景にあるのではないだろうか。

そのような中で、ケータイやネットからトラブルや事件に巻き込まれる報道が出始める。例えば2004年には長崎で小6 女兒による同級生殺害事件が起きているが、これもネットでの交流とトラブルが原因の一つとされた。2007年には、ケータイサイトで知り合った男に女子高生が殺害された青森の事件が話題となった。

ケータイを「子どもには教育的配慮や規制が必要」と見ることによって、大人たちに分かりやすい対策を示しているとは言えよう。しかし、ネットいじめ問題をケータイ問題に置きかえることでいくつかの問題も指摘できる。新しいメディア機器（テレビ、ゲーム、PC、ケータイ）が登場するたび、子どもへの影響が議論になる。しかし、小針（2010）¹⁰⁾が『『子どもたちが携帯電話をもつようになったからだ』とか『それだけ携帯電話が安価になったからだ』という言明は実のところ要因・背景・実態を全く説明していない』と指摘しているように、新しいメディア機器であるケータイをネットいじめ問題の原因として論じていても、対策を講じる議論が始まったことにはならないのではないかな。

第一に、高校生の90%以上がもつケータイは、持たせる・持たせないという議論をはじめの以前にそれ自体がもはやインフラ化していて、持っていることを前提として議論を進めていかざるを得ないと考えられるからである。

第二に、ソーシャル化、リアルタイム化が進み、ネットで交流するユーザーが増えれば、ネットでのトラブルが増えるのも言わば必然である。多くの人がケータイを持っていたら、ケータイの問題が増える。「ネットいじめ急増」というのは、その意味で当然である。子どもたちのネットの交流は、実際、ほとんどが平和的に行われているという指摘もある(荻上 2008)¹¹⁾。平和的に交流をしているが、あるときにトラブルになるというのは、ネットに限らず人が交流していれば当然生じる。したがって、「ネットいじめ急増」を主張するだけでは、ネットいじめを論じたことにならない。

ネットいじめの問題を考えるならば、子どもとケータイという認識でとらえるだけでは、その要因や背景を分析することにはつながらない。

学校裏サイトで誹謗中傷するから子どもからケータイを取り上げる、フィルタリングをかけてサイトに接続できないようにするという対策を取っても、ネットいじめの解決にはならないだろう。それはネットへのアクセス方法は他にパソコンやモバイル端末からできるという点がまずあげられるがそれだけではない。より大きいのは、ネットいじめの「本当の要因」が存在していると考えられるからである。

ネットいじめの加害者の多くは、クラスメートや学校の友人などの見知った者によるものだ(田川 2010)¹²⁾。不特定多数の匿名ユーザーが誹謗中傷を繰り返すということがないわけではない。しかし、多くは見知った者同士の交流の中で生まれるトラブルである。つまりネットいじめ問題は、学校の人間関係の問題であるということである。したがって、ケータイを持たせないとかフィルタリングとかの対策を取るのに集中することで、こうした学校内の人間関係の問題が隠されてしまう。

学校内の人間関係を把握し、対応・対策を論じることを抜きにしてネットいじめ問題に取り組んでも、解決に至らないだけでなく、「本当の要因」を隠し続けることになってしまう。

ネットいじめの現状や対応に対する指摘は多い。しかしそれを学校の人間関係の問題として提起する視点はほとんどない。ケータイの規制やフィルタリングな

どのわかりやすい対策は提示されるが、人間関係の問題としてとらえられることがない。新聞記事の分析から見たネットいじめ言説には以上のような特徴がある。

5. まとめ

ここまで、ネットいじめ言説の特徴について、新聞に掲載された記事から検討してきた。ネットいじめに対する理解は広がったと見られ、悪質で深刻な事態が子どもたちの間に広がっているとの記事は少なくなった。また、ネットいじめが問題化し始めた当初は対応に苦慮していた現場も、しだいに成功事例が紹介されたり対応策が検討されるようになってきた。

しかし、ケータイは規制が必要なもの、適切な使用を教えなければならないものとの認識は変わっておらず、友人や他者との交流に積極的に利用しようとの記事はほとんどない。さらに、学校内の人間関係がネットに持ち込まれると指摘するものは全くと言っていいほどない。ネットいじめが子どもとケータイ問題としてクローズアップされることで、ネットいじめの「本当の原因」である学校の人間関係が隠されてしまう。ネットいじめを「子どもとケータイ」問題に変換し閉じこめるのではなく、人間関係やコミュニケーションの問題として捉え直す必要があるだろう¹³⁾。今後は、ソーシャル化、リアルタイム化が進む中でのネットいじめの新しさ、表層の変化に潜む深層の問題などについてさらに検討していきたい。

注

- 1) 例えば、総務省のIT政策大綱も2005年にはICT政策大綱へと変更されている。それまで、インターネットの関連技術がIT (information technology) と呼ばれていたのに対し、2000年代半ばごろからICT (information and communication technology) と呼ばれるようになってきた。この点から見ても、コミュニケーション技術としてネットをとらえる視点が2000年代半ば頃から定着してきた。
- 2) i-modeのサービス開始が1999年、各キャリア間のショートメッセージはその少し前に始まっていた。

文献

- 1) 田川隆博, ネットいじめの新しさ, いじめ手法への着目から, 深谷昌志, 深谷和子, 高旗正人編, ユビキタス社会の中での子どもの成長, ケータイ時代

- を生きる子どもたち，ハーベスト社（2010）。
- 2) 荻上チキ，ネットいじめ，ウェブ社会と終わりのなき「キャラ戦争」，PHP 新書（2008）。
 - 3) 渋井哲也，学校裏サイト，進化するネットいじめ，晋遊舎ブラック新書（2008）。
 - 4) 下田博次，学校裏サイト，東洋経済新報社（2008）。
 - 5) 森口朗，いじめの構造，新潮社（2007）。
 - 6) 内閣府，第5回情報化社会と青少年に関する意識調査報告書（2007）。
 - 7) 総務省，平成20年通信利用動向調査報告書 世帯編（2009）。
 - 8) 石野純也，ケータイチルドレン—子どもたちはなぜ携帯電話に没頭するのか？，ソフトバンク新書（2008）。
 - 9) 内閣府，青少年のインターネット利用環境実態調査（2011）。
 - 10) 小針誠，学校裏サイトにおける『ネットいじめ』の構造と対策，深谷昌志，深谷和子，高旗正人編，ユビキタス社会の中での子どもの成長，ケータイ時代を生きる子どもたち，ハーベスト社（2010）。
 - 11) 荻上，前掲2（2008）。
 - 12) 田川，前掲1（2010）。
 - 13) 田川，前掲1（2010）。

